

学生の手で定義を作り、 伸びた力を分析することで、 さらなる発揮・向上につながる

実感がないと理解できない。認識が深まれば能力も伸びる

跡見学園女子大学マネジメント学部の芝原脩次教授のゼミでは、ゼミで行うプロジェクト活動を通して「社会人基礎力」を育成しています。ここでは、「社会人基礎力」という言語や、12の能力要素の活用はプロジェクトの活動中は伝えず、活動終了後に学生自身に「自分達にとっての『社会人基礎力』」を定義させ、理解を深めさせるという方法を取りました。

先生は「社会人基礎力」を十分に意識し学生を指導しますが、学生達にはプロジェクト活動に専念させ、プロジェクトで自分達の成長を実感した後に初めて「社会人基礎力」を紹介します。活動を振り返るときに、どのような能力が伸びたかを考え、それを「社会人

基礎力」と紐付けるのです。そうすると、学生達の中に言葉がすとんと落ちてきます。逆に、能力を発揮した実感がないと、本当に理解できるかわかりません。単なるうわべだけの理解になる恐れもあります。

さらに、「社会人基礎力」の12の能力要素の定義を学生自身で行いました。自分がプロジェクトの活動の中で取った行動と、12の能力要素の間を行ったり来たりして考えをめぐらすことで、「社会人基礎力」の認識が深まる、認識が深まれば「社会人基礎力」が伸びる、そういったことが期待される仕掛けになりました。

芝原先生のこの手法は、就職活動中の3年生、就職を控えた4年生にはいつそう効果的であると思われます。活動の成果や身に付けた能力を、自分のものになった「社会人基礎力」の言葉でアピールすることができるようからです。さらに就職後のキャリア形成にも有効であると考えられます。

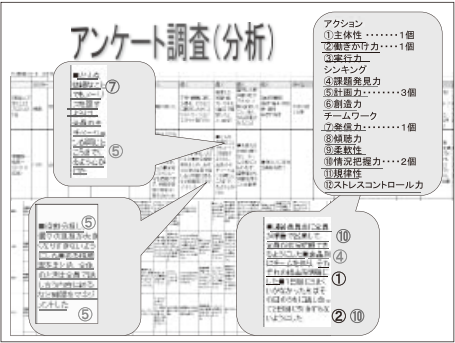
プロジェクトで伸びた力をアンケート、学生自身で分析

跡見学園女子大学マネジメント学部では、①社会が求めている人材像と「3つのスキル」②キャリア形成のための「3つのワーク」③「社会人基礎力」養成の「3つの力と12の能力要素」という具体的な目標を掲げています。

芝原先生のゼミでは、これらの目標の達成のためには、理論と実践の場を設けることが必要であるとして、ゼミ活動で「プロジェクト」を実施しています。2年次の「起業家精神」、3・4年次の「女性活躍の条件研究」という全員参加のテーマの他、50以上のプロ

分析の流れを学生がまとめたスライド資料

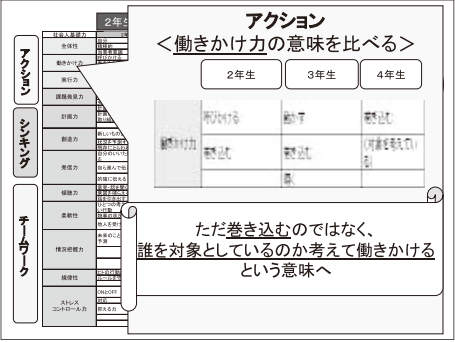
<プロジェクトの振り返りアンケートの記述を社会人基礎力の言葉で分類>



<社会人基礎力の言葉の意味アンケートからキーワードを抽出>



<働きかけ力の意味を比べる>



図版提供 跡見学園女子大学

握力」の伸びが見られ、「ストレスコントロール力」の場合は、「2年生ではまったく記述が表れなかったが、3年生になって伸びが認識されてきた」などの発見もありました。

12の能力要素の意味合いが、学年や経験の度合いで深化

これらの記述には「社会人基礎力」の12の能力要素の意味をどのように特に指定はしませんでした。集計の際には、どのような力が発揮されたのかを、「社会人基礎力」の12の要素に分類して学年ごとに分析しました。

これと同時に、「社会人基礎力」の12の能力要素の意味をどのように考えるか」というアンケートを行い、全てのゼミ生が「社会人基礎力」の言葉の意味を考えて、自分なりの定義、意味合いを記述しました。ここからは、学年ごとに出現数の多かったキーワードを拾い出しました。

プロジェクトを設定し、57名（平成21年度）全てのゼミ生が複数のプロジェクトに参加して、プロジェクトの企画、運営、予算管理などを分担して行っています。ゼミの3年間で複数のプロジェクトを何度も経験し、社会人として求められている力をスパイラル的に高めていくのが狙いです。（育成手法については、p2330参照）

ゼミでは、この一連のプロジェクトの最後に、学生自身にプロジェクトの振り返りと、その分析を行わせました。学生自身でアンケートを作成し、左記の項目について2～4年生の全てのゼミ生が回答しました。

- ・プロジェクトでの不安・課題・衝突を、それぞれどのように解決したか
- ・プロジェクト活動で発揮した、習得した知識・能力・スキル
- ・プロジェクト活動を通じて自覚した長所・強み・持ち味・適性

分析の結果、「社会人基礎力」の意味が学年によって変化し、また深化していることが明らかになりましたが、重要なのは、そのことに学生自身が気付くように仕向けたことです。『社会人基礎力』では、学年や経験が進むにつれて発揮レベルが高くなることが重要ですが、そのためには、能力要素の捉え方の認識が深まる必要があります。このことは学生の成長を促すことにもつながります」と芝原先生は語ります。そのような視点から、「社会人基礎力」の言葉そのものに重きを置き、言葉の解釈を学生に行わせることで、振り返りと気付きの質を高めようとした、ユニークな取り組みです。

言葉の解釈を行ったことで、発揮につながる

■学生の声

例えば、今までのプロジェクトを思い浮かべて、『主体性』を考えたのはどのプロジェクトだったかな」などと考えて、「これは思いつかないから、もしかしたら私はあまり行動してないのかもしれない」と気付いたりしました。「じゃあこれをもっと強めていくためには、これからどうやって行動したり、どうやって皆に働きかければいいのだろう」と考え、「次のプロジェクトや面接ではこれを発揮するようにしよう」と。

就職活動では、相手から受けた質問の内容が、「社会人基礎力」の中の何を求めているのかということを考えるようになります。この言葉は社会人に求められていることだと思うので、「今はその中のどの面を試されているのだろう」と考える。例えば圧迫面接だったら「この人は今私の『ストレスコントロール力』を見ているのかな」と、自分で落とし込むことはできるようになりました。そうすると、そのまま乗っかるのではなく冷静に対応しようと思うのですが、この対応は、「ストレスコントロール力」という言葉を知らなかったら、たぶん考えつかなかったと思います。

就職活動で相手に伝えたいときに、どうしても話がまとまらなかったりして「自分は何が言いたいんだろう?」と思ったときに、この言葉に当てはめるようになりました。例えば「私はここで自分の『傾聴力』について伝えたいんだな」と思ったら、「傾聴力」という言葉を頭の中に置きながら、それを相手に伝えたいという気持ちで考えて言うようになりました。「傾聴力」という言葉を面接で直接使うときもありますし、使わないときもあります。それは場面を見て使い分けています。うまくまとめるよりはエピソードで伝えた方が相手は好きだろうなと感じることもありますし、簡潔にまとめて言うてほしいんだろうなと思ったら、「傾聴力」という言葉を使ってまとめて伝えることもあります。自分が言いたい内容を、結局どれかの言葉に当てはめているとは思いません。